

教師の主体性から始める学校改革

～探究的な学び研究推進チーム「ONE STEPpers」の取組～

1 はじめに

芦屋市は、兵庫県の南東部、六甲山と大阪湾にはさまれた、人口約9万人のコンパクトなまちです。市内には市立小学校8校、中学校3校、幼稚園5園等があり、古くから「教育のまち」として、市民の教育への関心がたいへん高い地域です。

本市の子供たちの学力は、全国学力・学習状況調査において、全教科で全国平均を大きく上回る高い水準にある一方で、質問紙調査では、勉強が「好き」「大切」「役に立つ」と感じる割合や、「夢や目標をもっている」「学校が楽しい」と答える割合が伸び悩み、全国平均を下回るといった実態がありました。

令和6年には東京大学公共政策大学院の鈴木寛教授からは、OECDの調査を踏まえ、「日本の子供は学力こそ加盟国でトップだが、自己肯定感や自律的に学習を行う自信に課題がある」という指摘をいただきました。これはまさに本市の子供たちの姿と重なります。学力は高いのに、自己肯定感や自己有用感、学ぶ意義の実感に課題を抱えている——この現実と正面から向き合うため、本市は子供の「主体性の回復」を教育施策の中心に据えることとしました。本稿では、その中核を担う教員の自主的な研究チーム「ONE STEPpers（ワン・ステッパーズ）」の取組について紹介します。

2 Ashiya PEACE プロジェクト

令和6年度より、本市第3期芦屋市教育振興基本計画の理念「一人ひとりの個性や特性、理想や希望を踏まえた、公正で最適な学び（ちょうどの学び）」を具体化する総合的な枠組みとして、熊本大学大学院准教授の苫野一徳先生を招聘し、「Ashiya PEACE プロジェクト ～ONE STEP! 夢中になって学ぶ楽しさを!～」を启动しました。

PEACEとは、Place（居場所）、Explore（探究）、Assist（個別最適な支援）、Collaboration（協働）、Experience（体験・経験）の五つの頭文字です。どの子にとっても安心できる居場所を子供とともに考えること。学びの主体は子供とし、自ら立てた課題を探究していくこと。個々の特性やペース・学び方に応じること。一人では越えられない壁にあたったときには、仲間や教師の力を借り、つながりながら学ぶこと。そして、夢中になって遊び、学び、失敗や成功を繰り返す体験

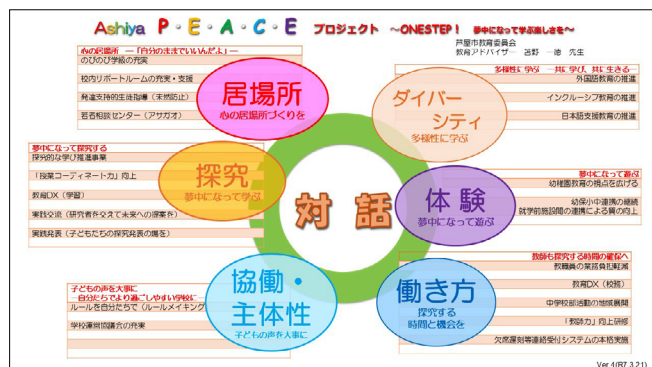


図1 Ashiya PEACE プロジェクトの全体像

を大切にすること。これら五つの真ん中に「対話」を置いています。

子供を信じ、委ねる。教師は個のニーズに寄り添い、学ぶ環境を構成し、励まし、適切にフィードバックを与える。子供が自ら「選び、決め、行う」ことを通して、夢中になって学ぶ楽しさを取り戻すことを目指しています。

3 「ONE STEPpers」立ち上げの経緯

「『安心して』学べる場をつくりたい。」「『学習意欲』を大切にしたい。」「どの子にも学校を『楽しい』と思てほしい。」そして「特定の教科だけで取り組むことではない。教科横断的な学習、問題解決的な学習やプロジェクト型の学習に、市内全体で取り組んでいく必要がある。」こうした指導主事同士の対話の積み重ねがAshiya PEACEプロジェクトを構想する中で出され、主に授業の中で具現化する「ONE STEPpers」の立ち上げにつながりました。

どうすれば市内全体に学びが広がるのか。

ここで本市は、従来の研究推進の在り方を根本から問い直しました。子供の主体性を引き出すには、まず教員自身が主体的に学び、探究することが必要ではないか。「教師の学びと子供の学びは相似形である」と言われるように、教育委員会が教師に求める学びの姿は、教師が子供に育みたい学びの姿と同じではないかという考えに至りました。

従来の研究推進は、教育委員会が学校を「指定」し、研究推進校が研究発表会を開いて成果を他校へ広げる、という形で取り組んでいました。しかし、指定された学校では「しなければならない」と負担感が先行しがちで、参観する側も「あの学校だからできること」「やってみたいけど大変そう」と受け止め、成果が市全体に広がりにくいという課題を感じていました。そして何より、教師の研究に対する主体性を奪ってしまう形ではないか——という懸念が生まれました。

そこで、研究指定校制度を廃止し、令和6年度、学びたい教員が自らの意思で集まる完全自主参加型の研究チーム「ONE STEPpers」を立ち上げました。教育委員会が教師を信じて委ねれば、教師も子供を信じて委ねられる。「相似形」の連鎖を、仕組みとして具体化することを目指しました。

4 「ONE STEPpers」の仕組みと取組

(1) 完全自主参加 ～それぞれのチャレンジを～

ONE STEPpers のコンセプトは「やりたいことを、やりたいときに、やりたいだけ」、「しなければならないことを設けない」です。子供の主体性を回復させる研究に関わるなら、好きなことを、好きな方法で、好きなだけ探究してよい。「来る者は拒まず、去る者は追わず」を合言葉に、参加も退会も自由です。

立ち上げから2年がたち、年度ごとの募集としていますが、今年は20代から60代までの約100名の教職員が参加しており、令和8年度からは市立幼稚園へ募集したことで、市内全ての16校園からそれぞれ1名以上の教職員が参加しています。幼・小・中の校種を越えたチームとなり、校種ごとの得意な領域を持ち寄って交流しながら、子供に「委ねる学び」への挑戦を支えています。

(2) 教育委員会による全面的なサポート

研究にかかる費用負担をはじめ、日程調整や講師依頼といった研究に付随する事務作業は、すべて教育委員会が代行します。教員は研究そのものに没頭できるようにしています。教員一人ひとりの「したいこと」を見つけ、形にする場となるよう、教育委員会は指示する立場ではなく、共に悩み、考え、寄り添う「伴走者」に徹しています。

(3) リフレクション会議 ～対話の文化を学校の日常に～

月に1回程度、参加教員が実践を持ち寄って語り合う情報交換・実践報告の場が「リフレクション会議」です。現地・オンラインの選択も欠席も自由。個別の研究テーマ・方法・ペースを尊重しながら、互いの実践を持ち寄り、対話し、「価値」を共有します。会議には、苫野一徳先生をはじめ、ONE STEPpers 専任講師である一般社団法人 School Transformation Networking (ScTN) 代表理事の山口裕也先生が適宜伴走し、実践の価値をフィードバックするとともに、次のステップを提示してくださっています。



写真1 対話を重ねるリフレクション会議の様子

令和7年からは、学校現場からの提案を対話して深める会議の形が増えてきました。学校現場主催の会では、教師が「学びの場」を自らの手でつくりあげ、その場のデザイン方法を獲得して校内研修へと広がっていきます。対話の文化を学校の日常にするステップが積み重ねられています。

(4) プロジェクト研究 ～好きなことを研究する～

参加教員は、自らの興味・関心のある研究についてプロジェクトをつくり、学校・学年・教科の垣根を越えてチームを組み、一緒に授業づくりと情報交換を行います。「好きなことを、研究する、形にする」が合言葉です。令和7年度には表1のとおり9つのプロジェクトが生まれ、地域の自然をフィールドにした探究から、企業・プロスポーツチームとの連携、自由進度学習、SEL（社

会性と情動の学習）まで、多彩なテーマのプロジェクトが生まれました。

研究テーマ	人数
企業連携プロジェクト	18
みんつく(特活)プロジェクト	23
打小ネイチャー(打出の森)プロジェクト	17
3教科同時自由進度学習	10
3年生算数プロジェクト	13
芦屋川探究プロジェクト	8
理科自由進度プロジェクト	10
SEL研究プロジェクト	20

表1 令和7年度のプロジェク研究テーマ

プロジェクトの数だけ、子供の学びの入口が増えます。打出（うちで）の森や芦屋川など身近なフィールドでの探究、3教科（国語・数学・理科）並行の自由進度学習、ホンモノを感じる企業連携探究学習。教員が夢中になって研究する姿が、そのまま子供が夢中になって学ぶ授業へとつながっています。

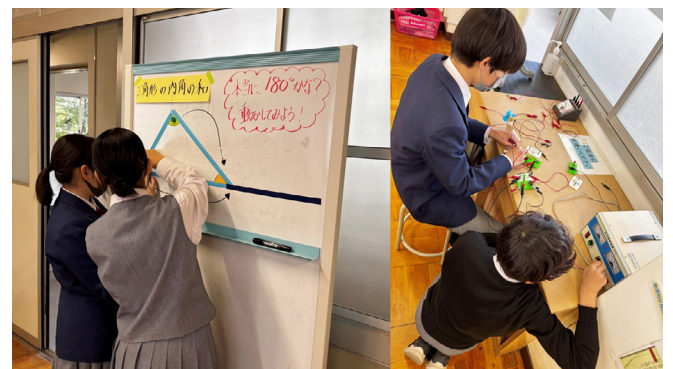


写真2 プロジェクト研究の実践の様子

(5) 先進校視察・先進校派遣

「具体が見たい・経験したい」という教員には、希望に応じて先進校への視察・派遣の機会を用意しています。令和7年度は表2のとおり、長野県伊那市立伊那小学校と愛知県東浦町立緒川小学校へ、それぞれ教員を

1週間派遣するという本格的な研修を実施しました。自分の興味があるところへ、選択して参加する。研修もまた主体的であることを大切にしています。

分野	派遣・視察先(令和7年度実績)
PBL・探究	伊那市立伊那小学校(1週間派遣)
単元内自由進度学習	東浦町立緒川小学校(1週間派遣)
全校ミーティング	新渡戸文化小学校
マイ探究	奈良女子大学附属小学校
新しい教育課程	中目黒小学校・原宿外苑中学校
ScTNの活用	加賀市立山中中学校
自治体間連携	生駒市のフォーラムへ出席

表2 先進校視察・先進校派遣の実績

(6) ScTN質問紙を活用した授業サイクル

本年度からは、後述する ScTN 質問紙を「対話ツール」として位置づけ、授業サイクルの構築に取り組んでいます。質問紙で現状を把握し、「なぜその数字なのか」「どうすればよいか」と仮説を立て、エビデンスに基づいて単元を構想し、実践・観察し、再び質問紙で検証する。このサイクルを、希望教員・市教委・プ



図2 ScTN 質問紙を活用した授業サイクル

ロジェクト参加教員が協働して回します。単元づくりには山口裕也先生（年2回）と指導主事（随時）が伴走し、助言します。データを評価のためではなく対話のために使う。その先に、教科研究の充実を見据えています。

5 成果と効果検証

取組の成果は、データによる検証とあわせて進めています。令和6年度より、一般社団法人 ScTN が提供・管理する、児童生徒の自己評価を回答方式とした「主体的・対話的で深い学びのための意識・実態調査」(ScTN 質問紙)を導入しました。対象は全市立小学校3年生から中学校3年生とし、4月・7月・12月・3月の年4回実施しています。

質問項目には、「授業では、『授業を進めるのは、先生ではなくて、自分だ』と思いながら学んでいる」「自分の興味や関心にもとづいて、自分なりに問いや課題を立てて学んでいる」「学習の方法やペースを自分で選んだり決めたりしながら学んでいる」など、まさに本市が育みたい主体性に関わる項目が含まれています。

市内全体の平均値を令和6年4月と令和7年12月で比較すると、ほぼすべての項目で数値が上昇しました。特に「学級の人々に関わることは、自分たちで、全員の考えや気持ちをたしかめてから決めている」は3.0

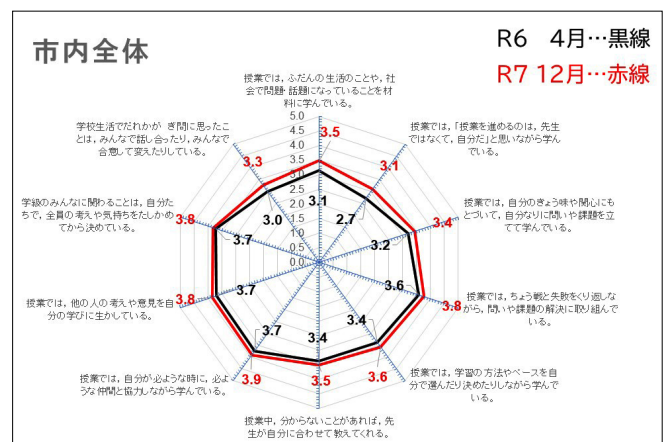


図3 ScTN 質問紙にみる子供の変化（市内全体）

から3.8へ、「授業を進めるのは自分だ」は2.7から3.1へと、主体性・協働性に関わる項目で大きな伸びが見られました。

数値以上に手応えを感じているのは、教員の変化です。リフレクション会議では、若手からベテランまでが対等に実践を語り合い、「隣のクラスがやっているなら、自分もやってみよう」と、挑戦が自然に伝播し始めています。研究指定の義務感からではなく、教員自身の「やってみたい」から始まった学びが、子供たちの「やってみたい」を引き出しつつあります。

6 おわりに

ONE STEPpers は、教育委員会が教師を信じて委ね、教師が子供を信じて委ねるという「相似形」の連鎖を、研究推進の仕組みとして具体化した取組です。一方で、課題もあります。参加が一部の教員にとどまらないよう、より多くの教員への周知と参加の裾野の拡大を図ること。また、現場主催のリフレクション会議を各校の校内研修へと広げ、対話の文化を文字どおり「学校の日常」にしていくことです。

「ONE STEP ～それぞれのチャレンジを!～」一人ひとりの教員の小さな一歩が、やがて市全体の大きな歩みになると信じ、本質的な対話を大切にしながら、教員一人ひとりの「やってみたい!」という気持ちを原動力に、芦屋の子供たちが夢中になって学ぶ楽しさを実感できるよう、これからも取組を進めていきます。